準決勝で敗退した土田（右）と決勝進出を決めた日永田

土田浩翔の後ろには多くのギャラリーがついたが……

で舞い上がって鳴いたなら非である。が、加藤はほぼノータイムだったし、鳴いた後の表情に後悔は見られない。加藤は、週に2、3回打つ麻雀を、そのまま決勝戦で見せた。

しかし、この鳴きで下家の大野に東と伍萬が流れ、テンパイが入る。

大野「リーチ」

ドラ

驚くべきことに、大野は今回で4回目の（読者大会含む）最強戦決勝進出である。また、他のタイトル戦決勝も数度経験している。彼の正体は、プロ顔負けの実績を持つアマチュア雀士だったのだ。

この強豪アマ・大野のリーチに対し、加藤は南をポン。高目満貫のテンパイで勝負を挑む。

チー

ポン

ドラ

だが、結果は加藤が をつかみ、大野に5千2百点放銃。

年間打荘数4千のプライド

「4度目の正直」の大野にとっては、幸先のよいスタートとなった。しかし、トイメンの後藤が大野の前に立ちはだかる。

東3局、西家の後藤の配牌。

ドラ ツモ

1巡目にしてイーシャンテン。 を暗カンすれば即テンパイの可能性もある。が、後藤はカンをせず打 とした。

決勝の大舞台。ただでさえ役牌の出が悪いのに、カンなどすれば警戒されて、東はおろか中も出なくなる。そう考えたのだろう。

3巡目、大野が切った 三萬をポンして打 。8巡目に中をツモって、後藤も5千2百点をアガり返した。

さらに後藤は、南1局1本場、親番でチャンス手をものにする。配牌は、平凡なものだった。

ドラ

後藤は北、東と切り出すが、マンズが押し寄せてきて、5巡目にはこのテンパイ。

ドラ

二萬 四萬 七萬の変則3メンチャンである。ここまでは誰が打っても同じなのだが、8巡目の一萬ツモ切りが秀逸だった。

一萬ツモで打二萬なら待ちは三萬六萬伍萬に変化する。

場に切れている（三萬六萬）1枚ずつ）枚数を考慮すれば両者とも6枚待ちだ。こうやって後から数えれば簡単だが、実際に打っている最中は勝手が違う。手が止まるのが普通だが、後藤はノータイムで一萬を切った。

後藤「手変わりがあるのは分かってたけど、アガリ牌以外は全部ツモ切ろうと決めてました。気配を消したかったので……」

事実、後藤のメンホンに対し、他3者はほとんどノーケアだった。素直に手を進めていた大野が、イーシャンテンで四萬を切り、後藤の親満に飛び込んだ……。

この2局を見ただけで、後藤がただの麻雀好きでないことは明白である。そして、事実そうだった。

後藤はフリー雀荘の主任だったのだ。

「プロがなんだ、俺だって麻雀で食ってるんだ」

後藤が言ったわけではない。しかし、メンバー稼業に身を置く者は、少なからずそういった矜持を持っているものだ。プロ雀士よりも頻繁に麻雀を打ち、店の売上に頭を悩まされ、客のあしらいもする。そんな人間が、特別な1半荘を打ちに、遠路はるばる金沢からやって来た。最強戦にかける意気込みも、プロに負けなかった。

後藤は年間に4千以上の半荘を打つという。最強戦の決勝戦は、その4千回のうちの1回。だが、このたった1回だけは特別だった。いつもより慎重に打牌を選んだ。振らないように、後悔しないように……。ただし、オーラスだけは、いつもトップ目にいるときのように逃げ切った。

ポン

ツモ ドラ

後藤にとっては、忘れられない4千分の1の半荘となった。

優勝　後藤正博

準優勝　加藤忠文

3位　日永田一郎

4位　大野勝彦